

フィリップ・ヘルヴェッヘ指揮 J.S.Bach『ミサ曲 口短調』

2000年6月1日(木) サントリーホール

管弦楽と合唱 コレギウム・ヴォカール

ソプラノ デボラ・ヨーク

アルト インゲボルク・ダンツ

テノール マーク・パドモア

バス ペーター・コーイ

ヘルヴェッヘが手兵を引き連れての演奏で、表現したいことが非常に伝わってくる演奏だった。座席が2階 LA ブロック2列目14番という席だったため、聞こえやすい音に偏りがあることは否めなかったが(ソリスト歌手の声が若干聞こえづらい。通奏低音の音がよく聞こえる)、指揮者の表情や指示がよく見えたことは非常によかった。

非常に気持ちの良い緊張感が味わえ、かつ、帰宅後もはっきりとした余韻の残る大きな感動を味わえた。クラシックニュース宅配便でも、この演奏会のことに触れられていたので以下に引用しておく。

>

>

>

クラシックニュース宅配便 No.106 [2000.6.5]

>

>

>

<http://www.music.co.jp/classicnews/>

>

>

>

> * クラシック・ニュース スタッフより

>

> 先週のヘルヴェッヘ:コレギウム・ヴォカールのバッハ:口短調ミサはもの

> すごい感動的でした。非常に内省的な表現の中に多くのメッセージがあったよう

> に思いました。

>

(以下略)

(プロデューサー 藪田益資)

>

なお、全く音楽とは関係ないが、この日は皇太子ご夫妻もいらしていた。

演奏会の感想

Kyrie

まだ、自分の座った座席での音の聞こえ方になれていない。口短調は以前アマチュア合唱団に所属してアルトパートを歌ったことがあるため(現在トマス教会カントールのゲオルク・ビラー氏に指導していただいた、とても貴重な体験です)、必然的に合唱、しかもアルトが気になる。コレギウム・ヴォカールレの今回の公演ではソプラノ、アルトが11人(前列)、テノール、バスが10人(後列)の並びである。冒頭の合唱では、カウンターテナー2名を含む4人がアルトを担当していた。各パート数名ずつということになるが、この冒頭の合唱でも何と各パートの存在感があることか。決して薄すぎるとは感じさせない。そして、合唱もオーケストラも非常に音程が正確である。当たり前のことと言ってしまうとそれまでのことだが、冒頭の Kyrie eleison も3曲目の Kyrie eleison もいざ声に出そうと思うと非常に難しいことを体験済みなので、このようにぴたりと着地を決めた演技のように正確な音が迷いなくぴたりと決まって聞こえてくると実に心地よい。この Kyrie の部分を聞いた感想としては、重厚というより厳肅、しめやか、といった演奏になるのではないかと予想された。

Christe eleison はソプラノとアルトのソロによる重唱。座席のせいかもしれないが、ソリストの声が少し聞こえづらい。アルトは音域的にある程度仕方ないとしても、ソプラノはもう少し抜けるように響いてきてもいいのでは……と感じた。

Gloria

Gloria in excelsis Kyrie とは一転して、まさしく Gloria と歌いたくなる。ここで登場したトランペットも実にうまい。

Et in terra pax 前曲 Gloria からつづいて、この曲に入る。この曲ではやはりフーガの部分が一番好きだ。今回の演奏ではもちろん気持ちの良いフーガを聴かせてくれた。ここでは、ヘルヴェッヘが特にテナーのパートを歌い上げるように強調して指示していたことが興味深かった。単に合唱の中でのバランスの問題か、それとも、もっと深い意図があったのか。

Laudamus te バイオリンソロの装飾音が実に見事。ソプラノのソロが今ひとつ自己主張がなかったため、とにかくバイオリンに聞き入ってしまった。そういえば、ソロに限らず弦楽器もこのオーケストラは非常にうまい。パートとしてぴったりと揃っている感じがする。

Gratias agimus tibi テンポは私には若干速めに感じられた。徐々に広がっていくような音楽の高揚と共に、何ともいえぬ幸福感に包まれる。

Domine Deus テナーソロは大変快適に聞こえる。先ほど来気になっていたソプラノはやはり少し切れが悪く感じる。のどの調子が万全ではないのだろうか。声質自体は非常にいいものを感じさせてくれるだけに若干残念だ。

Qui tollis peccata mundi この曲は前曲(Domine Deus)からとぎれることなく続いて始まった。この緊張が続いたまま、曲が変わる感じが何とも素晴らしい。楽譜通り、ソプラノ1の3人はお休みしていた。

Quoniam tu solus sanctus この曲の圧巻はなんといっても、ホルン(ナチュラルホルン)のソロ。もちろんバスのソロも素晴らしかった。ペーター・コーイの声がCDで聞くのとはちょっと異なって難じられたが。

でも、やはりこの曲の朗々とした美しさはホルンによるものだとは個人的には信じている。また、座席が通奏低音系が非常によく聞こえる角度だったためか、この曲でも通奏低音とい

うのは重要な位置を占めているのだな、と実感した。

Cum Sancto Spiritu 前曲(Quoniam tu solus sanctus)からこの曲へのうって変わった変化。この切り換え、緊張感がほんとに素晴らしい。この緊張感はフーガそして最後まで維持された。トランペットの響きも大変気持ちよく、前半部は非常に気分の高揚した中で終わった。それにしてもあの人数でよくこれだけ壮大な音楽に仕上げられるものと感心する。

チューニング。指揮者とソリスト一旦退場。

Symolum Micenum

このニケア信経の部分はミサの中核をなす部分で最も重要だということを以前ビラー氏から指導を受けたときに何度も繰り返しお話ししていただいた。前半部が非常に良かったので後半部は非常に楽しみだった。

Credo テナーから順にバス、アルトとはいり、ソプラノが入ったとき、その声の張りつめた透明感に思わず息をのんだ。

Et incarnatus est 処女受胎を表わしたこの曲はバッハに限らず、他のミサでも独特な作りになっていることが多い。この口短調でも、ちょっと不安定な感じを与える神秘的な下行型で、微妙な緊張感を与えてくれる。今回の演奏ではこのような感じがよく味わえた。

Crucifixus 何といっても非常に印象に残ったのは、通奏低音のかもしれないあの低音のリズム。まるで鼓動のようなこのリズムは、重苦しい運命のようにのしかかってきた。合唱はかなりのマルカートで、言葉が大変よく強調されていた。

Et resurrexit 音程が正確なため、前曲(Crucifixus)の最後の数小節はこの曲のための重要なつなぎとして効果を発揮していることがよくわかる。キリスト教徒でなくても、十字架にかけられたイエスの復活、これを待っていたんだという気持ちにさせられる。

Et iterum venturus のところはバスのソロが歌い上げた。楽譜(Baerenreiter urtext)には一応、バスの合唱部分が歌うように書かれているが、このバスのソロは大変迫力があってかっこよかった。

Confiteor 通奏低音と合唱のみ。指揮者は合唱の指揮に専念していた。縦の拍をきちんと揃えることに注意していたように思われる。興味深かったのは、ほとんどすべてのConfiteor の入りのところを一緒に歌って指示していたところだった。信仰告白に関わるこの重要語句を重視していることの現われだろうか、と感じられた。

Confiteor の最後の adagio で出てくる Et expecto resurrectionem は、指揮者から(おそらく)心を込めてという指示が出た。ヘルヴェッへの指揮は初めて見るものにもたいへんわかりやすく、歌わせようとして情感を込めるとき(わき上がらせるような振り方をする)、心を込めてというとき(胸の前で手を握っている)があり、後者の場合の最上級がほとんど合掌状態だった。つなぎの部分で十分神秘的な気分になったところで(このようなことでもきちんと緊張感が保たれるのが素晴らしい)、指揮者は全楽器に対して次に来たるべき華やかに始まる Et expecto resurrectionem mortuorum の指示を出した。聴いているこちらまで一緒に緊張してしまった。ここから先はむしろ走りすぎないようにコントロールしているといったように、縦をきちんと揃えるような振り方をしていた。最後のアーメンは歯切れ良く終わった。

Osanna のコーラスのための配置換え

Sanctus

最初の一音をオルガンで出した後、Sanctus が始まった。私はこの Sanctus が何とも大らかな気分になさしてくれるので大好きだ。この演奏でも、私の期待を裏切ることなく気持ちよく歌い上げてくれた。

Pleni sunt coeli et terra のところから、拍子が変わり、それまでの4拍子が3拍子(3/8)になる。ヘルヴェッヘはこの部分からちょっと面白い振り方をしていた。始めの2小節は1小節を大きく一つ振りにして3拍子を取り、3小節目は8分音符を一泊にとって3つ振るというパターンが何度か繰り返されたことだ。

Osanna in excelsis ここで特筆すべきは8声の合唱。先ほどから何度も書いているように音に偏りのあると思われる私の席からでも、このポリフォニーは十分に堪能することができた。いや、ほんとに気持ちよかったです(本音を言えば一緒に歌いたかった)。

Benedictus テナーソロ、フルートラベルソ、通奏低音(チェロー丁のみ)。ここでの通奏低音は、通奏低音というより、低音のソロ楽器というのが相応しいような存在感があった。全曲を通して言えることだが、今回の演奏では通奏低音の存在感をすごく感じた。単に音量という点でなく、曲を支えながら、リズムなどでは完全にその曲を牽引している役割を担っており、実は非常に表現力のあるパートだということが認識できた。通奏低音の熱演と共に自分もしっかり興奮していることがよくわかった。

Agnus Dei アルトソロとバイオリンのユニゾン、そして通奏低音。アルトは私の席からは少し聞こえにくかったものの、それでも十分に最後の Agnus Dei に相応しいしめやかな雰囲気伝えてくれた。この辺りまで来ると、口短調ミサももうわずかしが残っていない、という寂しさも重なってくる。ここで面白かったことは、バイオリンのユニゾンの旋律が、アルトと同等の比重で対等に掛け合って歌っていたことだ。指揮者の指示は非常に思い入れたっぷりのものだった。

Dona nobis pacem 前半部の Gratias と全く同じ旋律のこの終曲。Dona nobis pacem の歌詞が繰り返されるたびに、少しずつ高みに登り、心が次第に洗われていくような気持ちになれた。

以前からお気に入りのリヒター指揮ミュンヘンバッハ合唱団のライブ録音CDでは、確か最後の方の繰り返し部(トランペットが複数入ってくる辺りだったと思う)でかなりリタールラウンドがなされていたと思う。今回のヘルヴェッヘではそういった誇張はなかったが、聴いている者の気分としては十分に行き着くところ(崇高な地)に達したという感動と興奮を味わうことができた。非常に満足できる演奏だった。